

「歪んだ歴史と機動戦士」

いのうえ かゆう
井上 加勇

確かに、事実の一つしかないかもしれない。しかし、事実から生まれる歴史は、錯綜する視線の中に無数に存在しうる。そして、事実が歴史に再構成されていく過程において、その記述から消えていく者達がいる。それは、現実だけではなく、架空の歴史においても言えることであり、「ガンダム史」において消去の対象となったのは、「難民」という要素であった。

『ガンダム』シリーズの第一作、『機動戦士ガンダム』(1979)は、ジオン軍によるスペースコロニー襲撃によって始まる。ジオン軍によって生活の場を失った人々は、難民となって地球に運ばれる。しかし、地球を見る難民の老人の言葉は、故郷を逐われた者のそれではない。自分の家に帰ってきた帰還者のそれである。

「今度地球に帰ったら、わしは絶対に動かんよ。ジオンのやつらが攻めてきたって、地球連邦の偉いさんが強制退去を命令したって、わしは地球に骨をうずめるんだ。」(第五話「大気圏突入」)

つまり、彼等にとって、故郷はあくまでも地球であり、彼等を支配するのは、宇宙の民としての感情よりも、故郷から放逐された者としての屈折である。そして、その屈折の延長線上に、初めての宇宙国家であるジオン公国の総裁、ギレン・ザビは存在する。地球連邦は人口爆発から地球を守るために人々を宇宙に棄て去った。ギレンは、地球から棄てられた者達を代弁して大演説を行う。地球を滅ぼすのは我々ではない、お前達だ。地球連邦のエリートこそが地球を汚す愚か者であり、お前達こそが棄てられるべき存在なのだ。

しかし、地球と宇宙の民の関係を定義づける難民達のエピソードは、TV版の翌年に作られた映画版ガンダム三部作においても完全に削除される。例えば、主人公アムロも、本来は軍人ではなく民間人、つまり「難民」であり、彼が戦ったのは、あくまでも、執拗なジオン軍の襲撃の中で生き延びるためであった。TV版には、そんな彼を地球連邦の將軍レビルが冷徹に軍の組織に組み込んでいく、というシーンがある。

レビル さて、諸君はここで仮収容をうけて南米の連邦本部ジャブローに行ってもらおう。

アムロ あの。

レビル ん？なんだね。

アムロ はい。軍人に入りたくない人はどうするんですか？

レビル 既に君達は立派な軍人だが、軍を抜きたいというなら、一年間は刑務所に入ってもらおうことになるな。

アムロ そ、そんな、それじゃ、いやだっていう人でも。

レビル 君達はもともと軍隊で一番大事な秘密（連邦軍の秘密兵器、ガンダムのこと）を知ったのだ。本来なら一生刑務所に入ってもらわねばならんところだ。（第 26 話「復活のシャア」）

だが、同じ会議シーンが、映画版では次のように作り直される。

レビル 諸君らは、今後ジャブローにおもむき、ニュータイプの検査をうけてもらう。

アムロ 質問があります。

レビル ん？

アムロ ニュータイプの概念を教えてください。

レビル 直感力と洞察力に優れている人々と私は考えている。しかし、軍はどう考えているかはわからん。

アムロ 軍が…。

レビル いや、この問題は口で言うほどやさしくはない。人の認識力というのは、環境の変化によって拡大するとは言え、人間の普遍的な能力になるかわかっていない。（『機動戦士ガンダム 哀戦士』）

映画版では、主人公達の難民性は隠蔽され、レビルの冷徹さは消去される。そして、かわりにニュータイプ概念が物語の前面に押し出される。宇宙という環境によって認識力の拡大した人々を指し、来るべき人類の革新がそこにあるというニュータイプ。ガンダムにとって重要なこの概念であるが、ガンダムの物語は、必ずしもこの概念を中心に展開していたわけではなかった。TV版でニュータイプ概念が登場するのは、ストーリーが三分の二以上も終わってからとのことである。しかし、ニュータイプ概念の登場後、ガンダムの歴史はこの概念を中心としたものへと書き換えられていく。そして、上記のシーンで示されたように、ニュータイプ概念は、その登場によって、主人公達をはじめとする「難民」に対する認識を物語の中から消しさってしまう。認識を拡大するという設定のニュータイプが、物語においてはある認識を消しさってしまうという、設定の物語に対する裏切りが発生したのである。この裏切りの中で、ギレンの演説もまた変質する。映画版において、ギレンは宇宙の民は選ばれた民であると宣言する。ここに、宇宙の民の屈折は裏返った優越感へと変質していくのである。

シリーズ第二作『機動戦士ガンダム』（1985）は、初代ガンダムそのものではなく、その変質した歴史に接続するものとして作られる。難民達の描写を排除した歴史の上で、屈折の裏返りは映画以上に進行する。そこでは、人類が宇宙に出ることは一種の脅迫概念と化し、地球に愛着を持つ人々に対して「オールドタイプ」「地球の重力に魂をひかれた人々」といった罵詈雑言が投げつけられる。ニュータイプは、宇宙の民の優越を保証するための概念へと化していく。Zにおける戦いはひたすら不毛であった。地球の民の根拠無き優越

を背景に虐殺を繰り返すティターンズ。しかし、それに対する主人公達を動かす感情は、単なる屈折の裏返しによる優越感に過ぎない。根拠無き優越感と裏返しによる優越感の戦いは不毛な無限戦争へと転がり込んでいく。参加者達の死以外に結末のつけようのない無限戦争の中で、Zの登場人物達は当然のようにぼろぼろと死んでいき、主人公カミーユは発狂する。Zがその物語を歪んだ歴史に接続している限り、それは必然の結果であったと言える。

『ガンダム』シリーズにおいて、破滅の必然はある程度認識されていたと言える。しかし、その必然の原因である歴史の歪みには、ガンダムはまるで無自覚だった。映画『逆襲のシャア』においてはシャアは、その無自覚さ故に、必然の原因を「人類の業」なるものに帰し、自分がその「人類の業」を背負い込むことによって、人類を必然から解放するという夢にとりつかれる。しかし、小惑星を地球に落として地球の環境を破壊し、それによって全人類を強制的に宇宙にあげてニュータイプ化を促す、というプランは、裏返った優越感の極致に過ぎず、それは、単なる愚行の繰り返しであり、Zの無限戦争の継続にしか過ぎなかった。

「難民」を切り捨て、歪んでいったガンダムの歴史。「ガンダムは単に都合のいい設定をつなぎあわせることで戦争をでっちあげているに過ぎない」という、ガンダム嫌いの人々の批判は、その意味では正しい。ガンダムが歴史の歪みに対して無自覚であったことは、批判されねばならない。しかし、その歪みによる必然をその作品の中で引き受けたことは評価されねばならない。そして、富野由悠季は、1999年に新しいガンダム、『ターンAガンダム』を製作する。そこで、富野由悠季は、ムーンレイスと呼ばれる巨大な難民とそれと向き合う人々を、まるで、これまで切り捨ててきたものを拾い集めるかのように渾身丁寧に描く。ニュータイプ概念は姿を消して、屈折、優越感克服の対象へと変化する。それによって、登場人物達は、これまでのガンダムでは考えられないほど豊かな生を獲得することになった。ここにおいて、ガンダムは、初めてその歪んだ歴史、繰り返される無限戦争から解放されたのである。